

吉備国際大学研究紀要
 (社会福祉学部)
 第20号, 125-135, 2010

三人の子どもそれぞれに行動問題があった家族の母親面接 一個人面接による家族変化の技法ー

加藤 博仁

Counseling with a Mother whose All Three Children had Behavioral Problems: The Technique to Improve the Family through Individual Interview

Hirohito KATO

Abstract

In order to solve the behavioral problems with three children, the family support was conducted based on the counseling with their mother from the perspective of the systems approach. The supporting method was to encourage the client mother to understand her children and take a role in improving the family while empowering herself. In detail, they started rubbing themselves with cold and wet towels for good health to change the parent-child relationship, the development of the husband-wife relationship was attempted, their communication patterns were altered, and their home environment was adjusted, and so on. In this case, the behavioral problems with the three children have been solved through the above-mentioned changes in the structure and functions of the family. Then, the mother-counseling techniques from the perspective of the systems approach were discussed.

Key words : counseling with a mother, improving the family, systems approach,
 behavioral problems with children

キーワード : 母親面接、家族変化、システムズアプローチ、子どもの行動問題

はじめに

子どもの行動問題を解消・解決するためには、家族のあり方や親の関わり方を変えるという方法がとられ、その方法には家族システム（構造や機能）の変化を目指す家族療法と親の子ども理解や子どもへの対応の工夫を目指す親面接がある。

家族を全体としてみるという視点（Family as a whole）は、N. アッカーマン（1967）¹⁾ によって提

唱されたが、それがシステム論を理論的背景とした家族療法の「システムとしての家族（Family as a system）」へと変化していった（吉川・東、2001）²⁾。この家族をシステムとしてみるという認識論は、従来の「問題はクライアント自身にある」という個人の病理を援助対象とする視点に対して、「関係性の中に問題が生じる」という視点を提供したことになる。V. サティア（1970）³⁾ は、症状行動は患者が

その家族を救おうとする救助信号だと述べたが、鈴木(1983)⁴⁾は「家族システム自体の危機」であることを指摘した。

家族システム論は、個人に行動問題が生じた場合、その家族システムに介入し、それを変化させることによって個人の問題を解決するというアプローチを生んだ。このような家族システムを変化させるための援助目標として、岡堂(1983)⁵⁾は、①情意・思考のコミュニケーションの促進、②役割や連帯性にみられるゆがみと硬直性の変容、③援助者が役割モデル、教育者として役立つこと、を挙げている。

実際、家族療法のために面接室に家族全員を集めることは難しい。そのため、来所可能な家族を対象とした個人面接や親子同席面接によって、家族システムの変化を促すことになる。鈴木らの座談会(1987)⁶⁾の中で、平木は、個人面接であっても、「システム論的見方を導入したり、一人を通して家族全体の変化をうながす形で家族療法を行うことがある」と言い、鈴木も「たとえ個人と面接しても、家族というコンテクストの中で進めていけば家族療法に他なりません」と同意する。また、岡堂(1987)⁷⁾は、「あるシステムの小さな部分の変化が、システム全体を変容させるというのは、システム理論の前提である。だから、家族療法には、家族全員面接が必要だとか、夫婦療法では夫婦の同席面接が要件だ、というのは矛盾していることになる」と指摘する。すなわち、面接形態が個人面接や親面接であっても、家族システムの変化を目指すアプローチは可能なのである。

親面接の始まりは、A. フロイドの児童分析の補助にソーシャルワーカーが行った親面接やN. アッカーマンの母子同席面接、アドラー派の親面接などにある(中村、2006)⁸⁾。今日では、子どもの行動問題の解決のために、親面接は子どものプレイセラピーと並行して、あるいは親面接のみ単独で実施するのが一般的となっている。この親面接によって、

親の子ども理解や親子関係の調整、親の子どもへの対応支援などが行われる。

このような親などの個人を対象とした面接について、平木(1983)⁹⁾は、家族療法を行わない場合でも、家族システム論や家族内コミュニケーション理論、家族精神力動理論の観点が必要であることを指摘している。また、村上(2006)¹⁰⁾は、「親はそのシステムに大きな影響を及ぼすことのできるメンバーと考えられるので、親だけが来談する形であっても問題行動や症状の消失を目標とするアプローチを行うことが充分可能である」と言う。

この事例では、母親の主訴である男児の夜尿への早期対応が必要であった。そのため冷水摩擦を実施した。夜尿症に対する治療は、①生活面での指導、②理学的および外科的療法、③薬物療法、④心理的・教育的療法に分けられる。これらの治療法は原因によってその適用が異なるが、鍛錬法としての冷水摩擦は生活面での指導に属する方法である。冷水摩擦の効果性に関して、高木(1977)¹¹⁾は「冷水マサツを実施した子どもがほとんど全治および著効を示した」としている。近年、冷水摩擦に関する報告が少なくなったので、その適用理由や効果性について若干の考察を行った。

I. 事例の概要

1. 家族構成と子どもたちの行動問題

父親44歳(会社員)、母親43歳(主婦・パート)、父方祖父72歳(無職)。

長女 A 子14歳(中学2年生)：中学1年2学期より不登校傾向、学業不振(学年で最下位)、家庭内暴力(暴力は最近治まってきている)、反抗的態度、孤立、自暴自棄。

長男 B 男13歳(中学1年生)：夜尿(乳幼児期から断続的で、週2回程度失敗)、第二性徴の遅れ(性毛が生えず、勃起しない、子どもっぽい体つき、声変わりしないなど)、生活行動が自立的でない。

次男 C 男9歳（小学3年生）：夜尿が月に1回程度あるが、他に問題が認められない。

2. 家族の特徴

夫婦関係に際立った葛藤は生じていないが、子どもの養育に関しては母親任せになっており、夫婦の一致した養育態度は欠けていた。

長女 A 子は家族の中で孤立しており、部屋は3階の祖父の隣で、自分だけのテレビを持っていた。長女と家族の会話は基本的に少ないが、会話があったとしても言い争いになりやすかった。また、長女と母親の会話が一時的に成立しそうになると、長男がその邪魔をするというパターンがあった。母親は長女を、「放っておいても大丈夫な子、励ませば頑張る子」と評していた。不登校や家庭内暴力のきっかけは、学校でのいじめ問題で意気消沈した長女を、母親が無理に励まそうとしたことから始まったが、その後も反抗や学業不振、自暴自棄な態度が続いていた。

夜尿のある長男 B 男は、食卓では母親と並び、風呂を一緒に入り、寝室も一緒であった。母親は長男を、「ショックを受けやすい、可哀相な子」と評し、長男が甘えたり、怖がったりすると、母親は好んでその要求を満たし、世話を焼いた。

次男 C 男は、食卓では一番隅に位置しながら不満を漏らすこともなく、家族関係に支障はなく、自立的な生活態度を持っていた。母親は次男を、「安定している、危なげない自立的な子」と評していた。

このような特徴をもつ家族であるが、援助者は、家族システム論的な視点から、特に夫婦連合が未形成であること、異世代間のサブ・システムや不適切な役割関係、円滑でないコミュニケーション、コミュニケーションを阻害するパターンなどに注目した。また、子どもの成長や状態の変化にも関わらず、母親の子どもへのイメージや接し方は変化していないことも注目に値した。

II. カウンセリングの経過

初回面接 X 年8/22（母親と B 男が来談）

＜母子同席面接＞ 長男 B 男の難治性の夜尿に関して、他病院からの紹介状を持って母子が来所した。夜尿は幼児期から続いており、今でも週2回くらいの頻度で失敗する。B 男は怖がりで、夜一人でトイレも歯磨きもできず、風呂や寝る時にも怖がる。そのため、母親が夜のトイレや洗面所に付き添い、風呂や寝る時も一緒である。怖がりの甘えっ子とのこと。

B 男はこのような母親の説明を照れながら聞いていた。援助者が何か尋ねても、母親の顔を見てから返事をする。援助者には、太り気味の、人の良さそうな、素直で幼い感じの男の子に見え、どこか依存的な印象を持った。

＜B 男との個別面接＞ 援助者は、B 男自身の意見を聞こうと、母親に退席を願った。B 男はにこにこして、母親の言ったことは本当だと言う。部活は水泳部で、練習は厳しくないらしい。援助者には恥ずかしさや困っている感じが見えなかった。

＜母親との個別面接＞ 援助者は、母親に同席面接の時に長女 A 子のことで言いよどんだことについて尋ねた。すると、母親は A 子に不登校、家庭内暴力があったこと、今でも成績が最下位であることなどを、涙ながらに話し出した。援助者は、この問題は根が深そうなので、次回の相談内容とし、今回は主訴である B 男の夜尿についてその理解と対応方法を考えようと提案した。母親は、B 男にはもう少し自立して欲しいと語った。そこで、援助者は、B 男が甘え、怖がることによって、母親をコントロールし、そして自分の自立や成長も妨げているのだとの所見を伝えた。

＜再び母子同席面接＞ 援助者は、B 男に冷水摩擦を勧めた。B 男は、弟の C 男もたまに夜尿があるため、弟と一緒にやると言う。援助者は、B 男には、冷水摩擦をしたかどうかを表に記入するように指示

し、母親には息子たちがちゃんと冷水摩擦を実行するように管理・監督する役割を与えた。次回できたかどうかチェックするが、来所は母親のみで良いと伝えた。

第2回目面接 X年9/5（この回より母親面接）

冷水摩擦は二人とも続けており、夜尿の失敗はなく、面白がっているようだと言った。援助者は、母親が持参した冷水摩擦の表に子どもたちへの励ましのコメントを書いた。

母親はA子について、これまでの経緯を語った。A子は幼児期から手のかからない子だった。小学生の時は勉強もスポーツもよくでき、優等生だった。スイミングスクールに所属し、水泳大会で何度も優勝した。母親はタイムを1秒でもあげるため、叱咤激励した。励ませばそれに応える子だった。中学受験では女子大附属中学に合格し、勇んで水泳部に入った。すると先輩たちよりもタイムが良かった。そのことが原因と考えられる先輩からのいじめが始まった。夏の合宿や水泳大会には参加できず、部活を辞めた。A子は「もぬけの殻」のようになり、2学期から登校しなくなった。

そのようなA子に対して、母親はこれまでのように励まし、頑張らせようとした。ところが逆効果で、家庭内暴力の引き金となってしまった。その後、不登校と家庭内暴力が続いた。中学2年の現在まで、A子は、家では孤立しており、反抗的で自暴自棄的である。学校は時々休み、成績は学年最下位で、先生からは目を付けられている。部活は中学2年から卓球部に所属したがほとんど参加していない。

援助者は生活場面を尋ねた。すると、この家族の食卓の配置は、母親の隣りにB男が位置を占めていた（Fig. 1）。A子とC男が並び、父親と祖父が隣同士である。また、家族の部屋割りは、2階に2部屋あるが、寝る時にはB男と母親、C男と父親がそれぞれ一緒の部屋となり、A子は3階で、祖父の隣の部屋であった（Fig. 2）。援助者は、この

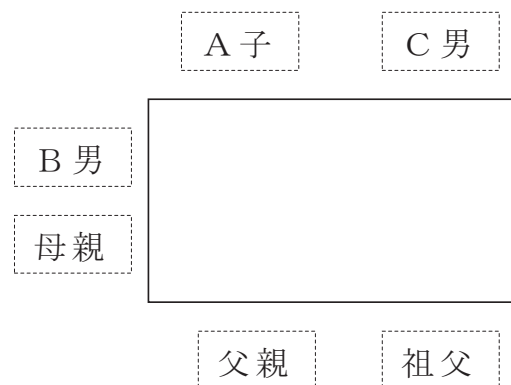


Fig. 1 食卓の配置

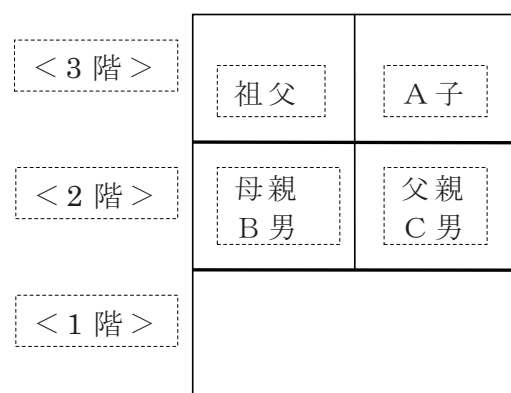


Fig. 2 各階の部屋割り

食卓の配置と部屋割りを母親の前で図に描き、B男が常に母親を独占する形になっていることを指摘した。

A子の機嫌の良い時には母親と言葉を交わすこともあるが、その時には必ずB男が割り込んでくると言う。何か質問をしたり、用事を言ったりする。母親がB男に応じていると、A子は捨て台詞を残して立ち去る。いつもこのパターンになるとのこと。A子は、母親とB男の関係をよく非難する。

第3回目面接 X年9/19

冷水摩擦は二人とも続いている。この1ヶ月間、B男もC男も夜尿がない。援助者は、夜尿の表に、拝見したというハンコを押し、男の子二人へのねぎらいと励ましのメッセージを書いた。そして、母親には、子どもたちの冷水摩擦をもう2週間続けさせることと、サボろうとした場合には母親が注意して

実行させることを提案した。

母親は夜尿への冷水摩擦の効果に安心し、A子に注意が向くようになった。この間、A子が母親に話しかけてきた時、やはりB男が割り込んできたことが何度かあった。母親は、B男を無視したり、「後で」と待たせることができた。後でB男に声をかけると、その話題はどうでもいいことであると確認できた。

A子は、「テストがあるから一日に幾つか英単語を覚えるんだ」と言ったりした。A子が登校する時に、母親が「行ってらっしゃい」と声をかけると、返事はしないが、こちらを振り向くようになった。母親の努力に対して、小さな変化が現れていることを確認した。

第4回目面接 X年10/3

男の子たちの冷水摩擦は続いているが、B男はサボろうとしがちである。弟のC男は言われなくても一人でやる。この2週間、二人とも夜尿なし。援助者は、さらに、母親には冷水摩擦を子どもたちに「やらせる」という役割を続けることを提案した。

B男の生育歴を尋ねた。幼児期から甘えん坊で、わがままだったと言う。B男が4歳の時に弟C男が生まれたが、母親は産後の体調が悪く1ヶ月間の入院が必要だった。退院して自宅に戻ると、A子は平気そうに見えたが、B男は顔つきがしょんぼりし、可哀相のようであった。特にB男には悪いことをしたと思った。B男はこんなにもショックを受けてしまう子なのだと感じた。それから、B男も一層怖がりになり、母親にしがみつこうな子になっていった。この時期から再び夜尿が始まった。

B男は、小学校3、4年生の頃、霊やオカルト現象に関する本を見て怖いと言いだした。怖いことを理由に、母親と一緒に風呂に入り、一緒に寝ることを要求し出した。弟が母親から離れだした時期であった。また、中学校に入り、水泳部の朝練があるため、早起きしなくてはならないと、再び母親と一

緒の部屋で寝ることを要求した。

母親のB男についての心配を尋ねた。B男は精神的な面だけでなく、体にも第二性徴が起らず(声変わり、性毛、ペニスの大きさ、勃起しないこと、筋肉のない体つきなど)、いつまでも子どもっぽいことが心配だと言う。

母親は頑張っているが、B男がうるさく助けを求めてくることに負けてしまい、風呂や寝る部屋と一緒にすることはまだある。援助者は、性的な関係の危険性を考え、母親にはA子の前で、B男と風呂や寝室を別にするように宣言するように提案した。

第5回目面接 X年11/7

母親は、B男との風呂や寝室を別にしたことを報告した。B男は弟と一緒に風呂に入り、一緒に部屋で寝ている。夜の歯みがきやトイレは、母親が取り合わないと、しぶしぶ一人で済ませている。大抵は弟と一緒にする。B男は、「お母さんは冷たくなった」と愚痴を言うが、母親は一人でやるのがB男のためになると思っている。

弟C男の夜尿は8月以来一度もなく、彼は自立的で前向きで問題がないとのこと。B男はこの1ヶ月に2回夜尿があった。その2回は冷水摩擦をサボった時であった。だから失敗した翌日は自分から進んで冷水摩擦をした。

昨日、A子は、学校でガムを噛んでいたのを生徒指導の先生に見つかり、1週間毎日、職員室に謝りに来るように言われた。だから学校には行きたくないと泣いた。母親はどう対応していいか分からなかったが、以前のようなやり方ではなく、背中をさすってやり、「今日は休んでいい」と言ってやった。そして、一日たった今日は、登校して行った。

この1ヶ月の間に、A子が耳掃除をしてほしいと言い、母親の膝の上に頭を乗せてきたことがあった。また、数学のテストで60点を取り、〇がたくさんあることに感激していたとのこと。

母親によると、B男は、母親が一定の距離をとっ

ていることに、しぶしぶ従っている。母親は、この対応がB男のためになると考えている。A子は、母親と話したり、何かを訴えたりするようになり、母親もそれを楽しめているとのこと。また、A子は自分から努力してみて、その成果を確認しているようであり、母親は、A子やB男への接し方に感触をつかんできたと言った。

第6回目面接 X年11/21

A子は、中間テストを受け、数学だけ良かった。英検にも合格した。また、A子の部屋のテレビが壊れてしまい、居間でみんなと一緒にテレビを観るようになった。両親は、しばらく壊れたテレビをそのままにしておこうと話合った。

父親は、「A子にも、弟たちと同じように接したらいいんじゃないか？」と提案したり、「A子には勉強や登校のことで色気を出さない方がいいんじゃないか？」と意見を言うようになった。父親が子どものことに関わり出してきたことを、援助者は母親と確認した。この10日間、B男の夜尿なし。この頃、B男は母親に反抗するようになってきた。

第7回目面接 X年12/25

A子に事件が起きたと言う。最近少し真面目になってきたA子に、担任が期末試験対策として、2週間前から英語の課題を出すようになった。毎日2時間分、10ページの英語の宿題がA子だけに与えられた。A子は3日間は頑張ったが、4日目からは遣り残しが出だし、期末試験の1週間前から「もう出来ない」と学校を休み出した。結局、期末試験は3日のうち1日だけしか出席できず、終業式も休んでしまった。この間、母親は、宿題が大変そうなA子を手伝ったり、A子の部屋で寝たりした。また、母親は、担任に宿題をもう少し減らしてほしいことや、A子の期末試験後の落ち込み状態を伝えたりした。A子の担任は今年初めてクラスを持った若い先生で、今回のことで反省の手紙をくれた。

父親は、みんなの気分転換のためにと、年末に家

族スキー旅行を計画した。

先日、B男が「僕はもう冷水摩擦はやらない」と言い出したと言う。この点について、援助者は母親と話合い、この機会をB男の自立につなげることを目論んだ。援助者は、その発言を「大人になることの宣言」として認める、よって冷水摩擦を止めてもいいと、B男へのクリスマスカードに書いた。C男はまだ一人で続けているため、12月31日に母親が何かご褒美をあげることにした。

第8回目面接 X+1年1/16

A子は年末に、「心を入れ替える」と言って髪を切った。正月には、父親が率先して、家族全員で麻雀やトランプをした。A子には、家庭教師をつけた。大人しそうな女子大生とのこと。A子は始業式には出席した。その翌日、突然、12日から2日間追試をすると担任に言われた。初日は休み、13日は遅刻したが出席。近頃のA子は、学校は時折休むが、親の言うことには聞く耳を持つようになった。援助者と母親は、今後のこともあり、学校側の味方としてスクールカウンセラーの援助を受けようと話し合った。

第9回目面接 X+1年2/2

A子は再び髪を切り、かなりショートカットになった。学校には休まず登校し、卓球の部活にも出ている。詩集『自分へのメッセージ』という本を読み出した。電話をよくしてくる担任に対し、母親は、「娘は少しほっといて欲しいみたいです」と伝えた。担任は、部活の試合の翌日に追試を企画したと言う。小テストを含め4日間テストが続くスケジュールである。母親は追試の日を少しずらして欲しいと要望した。

勉強のことが心配な母親がA子の部屋に行くと、A子に、「もう一緒に寝なくていい。しつこい！」と言われたとのこと。援助者は、しょげる母親と、A子のこの言動の意味を話し合った。この間の母親の行動は、小学校時代にA子の水泳のタイムを

あげるために叱咤激励した時と同様であり、今回はA子が、母親の激励によって無理に頑張られることを拒否したことになる。A子は人の指図に従うのではなく、髪を切ったり詩集を読み出したりしたことから、自分の意思で自分流に努力しようとしているのではないかと、援助者と母親は解釈し、A子の自立的な姿勢を評価することにした。

父親は家族全員そろわないとトランプ大会はやらないと言い出し、A子も参加している。また、父親は春になったら家を改装すると発表した。今度は、3階を3部屋に仕切り、3人の子どもに一部屋ずつあてがう。2階が夫婦の部屋と居間、1階が祖父の部屋などになる。A子は、「何で早くそうしてくれなかったの」と言い、子どもたち全員がその計画に大賛成している。B男は夜尿が全くなかった。母親への依頼心がだいぶ薄れたことを母親は自覚した。

母親からの電話連絡 X + 1年2/19

追試に行けなかった。今日、スクールカウンセラーに会う予定で、担任も同席するとのこと。

第10回目面接 X + 1年2/23

追試の日は、朝早くから起きて、食事もした。ところが、登校間際になって、母親に突っかかり、「じゃ、行かない!」と休んでしまった。漢字テストは受けた。今は3月の期末試験のために、家庭教師と勉強している。援助者と母親は、A子は試験のプレッシャーに腰が引け、行かないで済むきっかけをねらっており、下手に動く親のせいにして学校に行かないのではないかと考えた。そして、A子自身の試験への要求水準が高すぎるのか、自分への評価に直面することを恐れているのか、担任への反抗なのか、それとも母親を試しているのか、どう解釈すべきか分からなくなった。それでもA子を信じて見守っていこうと話し合った。

先日、B男が、母親がA子ばかりに関わることに腹をたて、荒れた。その夜、夜尿があった。翌日から、母親は二人の男の子とランニングを始めた。A

子はやりたいときに参加すると言った。

第11回目面接 X + 1年3/6

明日の3月7日から期末試験が始まる。これまで少しは勉強してきたが、日にちが近づき、A子は登校を渋り出している。プレッシャーが高まってきたようだ。学校からは、今回の試験を受けないなら、転校してくれと言われた。母親は、A子には自分の置かれている状況についてよく認識してもらい、今の学校を続けたいのか、公立の中学に転校するか、選択を迫った。今の学校を希望するなら、母親が断固として試験に連れて行く。どうしても行けないなら、本人があきらめたものと認める、母親はそのような覚悟をした。

母親からの電話連絡 X + 1年3/17

期末試験には3日間のうち2日間出席した。なんとか進級はできそう。

第12回目面接 X + 1年4/17

春休みの間に、母親は酒を飲んで感情的になり、A子に色々腹にためていたことを言ってしまった。しかし、A子にはその後遺症もないようで、翌日、A子が「ごめんね」と謝った。いつの間にか、A子と目を合わせてものを言えるようになっていた。A子は中学3年になり、クラスも、担任も代わり、遊び仲間とも別々になった。毎日登校している。勉強も少しずつするようになった。援助者と母親は、次回でカウンセリングを終結することに決めた。

第13回目面接 X + 1年5/20

A子は4月からずっと勉強している。今度の担任はさばけた人で、A子との折り合いも良く、「気を楽しんで」と言ってくれる。スクールカウンセラーにも「休み休みでいいから」と言われ、母子共に安心している。A子と母親との関係もずっと楽になり、一緒に買い物に行ったり、菓子作りをしたりする。B男は夜尿がなくなり、母親にまわりつかなかった。C男はまだ冷水摩擦を続けており、マイペースで危なげないと母親は感じている。A子

はそのうち中間試験もあるが、母親はあまり期待しないようにしていると言う。自分が知らぬ間にA子にプレッシャーをかけていたのかもしれないと母親は述懐した。「今の家族が好き」「もうじき、家の改装工事が始まる」と母親は語った。 終結。

後日談

終結から1年半たち、母親から連絡があり、A子は高校受験をし、少しランクを落とした男女共学の公立高校に通っているとのこと。テストでも問題を解ける喜びを味わっているらしい。B男は心配なくなり、割と真面目に受験勉強をしている。C男はリトルリーグの野球に夢中になっており、試合の時は母親が借り出される。

Ⅲ. 考 察

この事例の主訴は長男の夜尿であったが、実際には3人の子どもそれぞれに行動問題が生じていた。このような子どもたちに多問題が生じる背景には家族システムの歪みがあると考えられたため、そこへの介入を母親面接において実施した。考察として問題解決に有効であったと考えられる要因について分析した。

1. 母親による家族変化の推進

家族変化を推進するためには強力なパワーが必要である。この事例では、問題解決へのモチベーションの高い母親にその役割を担ってもらった。そのために、母親には自分たち家族のあり方に疑問を持ち、このあり方が子どもたちの問題を生じさせているという自覚を持ってもらった。たとえば、B男の自立しないことは母親への依存的態度が関連していること、A子の孤立や自暴自棄は母子のコミュニケーションの阻害や母親がかつてのA子のイメージに捉われていることが関連し、家族問題への取り組みには父親が参加していないこと、家族全体の連帯性が欠けていることなど、自分たち家族の実態につ

いて認識してもらう必要があった。このような認識によって変化へのモチベーションを高め、援助者は母親の変化への取り組みをサポートしていく体制をとった。

また、母親が家族変化を推進していくためには、努力に対する影響や効果に気づくことも大切である。そのため面接では、母親の努力に対する子どもや父親の変化を発見することに努めた。冷水摩擦によるB男とC男への夜尿の効果やB男が次第に恐怖感を我慢するようになり、自立意識を持つようになってきたこと、A子が母親に振り返るようになり、自ら努力しようとしてきたこと、父親が子どもの問題に関わるようになり、家族全員での活動を提案するようになったことなどである。

2. 冷水摩擦の適用と効果

冷水摩擦の適用は幾つかの目的があった。一つ目は夜尿への有効性があるからである。二つ目は、母親とB男の親密な関係を崩し、母子の役割関係を変化させるためである。すなわち、「子どもの言うなりになる母親」から、「自分の意思で子どもに指示する母親」への役割転換を図ろうとした。三つ目は、そのような母親に対してB男が反発し、自立・独立への動きを示すことを期待したためである。

冷水摩擦の実施にあたっては、母親とB男のモチベーションを高めた。母親に対しては、B男が母親をコントロールしていることを指摘し、B男が甘え続けることは自分自身の自立や成長を妨げることになると解釈し、母親のやる気を鼓舞した。B男には冷水摩擦を非常に効果的な方法として紹介した。ただし、一時的に良くなっても戻りやすいこと、そのためしばらく続ける必要があることを伝えた。

当初B男に伝えた冷水摩擦の期間は、まず2週間にした。表を作り冷水摩擦をしたら○、しなかったら×を付けさせ、母親の来所時にその表を援助者に示すということにした。援助者はその表に、二人の男の子へのねぎらいと励ましのメッセージを書くこ

とにした。母親と援助者の二重の管理体制である。冷水摩擦の効果は期待以上にすぐ現れた。

期間は、2週間できたらまた2週間を加えるようにした。冷水摩擦は、夜尿が解消しても母親によって続けさせた。この訓練の継続は、母子双方にこれまでと異なる役割関係に慣れることや心理的距離をおくことに貢献したと考えられた。

そして、いよいよB男が母親に反発し、「もうやらない」と言い出した時、この言動を「大人になることの宣言」であると意味づけ直すことによって、母子の共生・依存関係を断ち、B男の自立意識を高めようとした。

この事例では、冷水摩擦は、夜尿治療のみを目的とするのではなく、親子間の役割の変化、子どもの自発性・自立性の醸成をも目的とした。このように家族システム論の視点を取り入れると、一つの個人治療の技法も家族関係を変化させる手段として利用できると考えられた。

3. 生活場面における家族の構図

B男が母親に依存しすぎることやA子が孤立していることは、食卓の配置や部屋割りにも現れていた (Fig. 1, Fig. 2)。B男は食卓の配置や寝る時の部屋そして風呂でも母親を独占している。A子はC男の隣であるが食事を一人で後から食べたり、部屋は3階の祖父の隣であり、自室にテレビを持ち、一人で観ていた。家族との会話の量も少なかった。

このように家庭には、家族の構造や機能を体現している環境がある。それは、他にも部屋の状態や家具調度類、飾り物、個人の持ち物などの物理的環境を構成するものがあり、順番やリーダーシップ、親密さの程度、家族の意思の決定者、家族をコントロールしている者などの関係に関わるものがあり、さらにコミュニケーションへの参加や自由な表現の保証、伝達・受信・反応の適切さ、不適切な行動パターンなどが家族の特徴を体現している。これらは、援助者が尋ねることによって顕在化し、家族は改め

て自分たち家族の特徴を意識化することになる。

この事例では、食卓の配置はその後、父親とB男の席が入れ替わったが、結局A子が母親の隣に並んで落ち着いた。部屋割りに関しては、改装計画によって子ども3人が3階で各自部屋を持ち、夫婦が2階、祖父が1階となる。環境調整として、物理的環境や力動関係、コミュニケーションのあり方などを変化させることは、家族の生活そのものを規定していき、家族に与える影響は大きいと考えられる。

4. イメージに規定される態度

形成されたイメージは変化しにくいものである。この事例では、母親はA子に対して「放っておいても大丈夫な子、励ませば伸びる子」というイメージを持っていた。そのため、学校でのいじめの結果「もぬけの殻」になったA子に対して、母親は励ますという関わり方をした。それがA子を追い詰め家庭内暴力に発展させている。弱気になっているA子の味方になってあげることができなかったのである。その後、A子に対する見方が変化した時、これまでとは異なる対応ができた。

B男に対するイメージは4歳の頃から出来上がったようで、「ショックを受けやすく、怖がりで可哀相な子」というものである。そのためB男はいつまでも甘え、怖がることによって母親をコントロールし、その保護を得るようになっている。この母子の依存・共生関係は両者にとって心地良く、変化には抵抗があるため、それを解消するために冷水摩擦による役割の修正が必要であった。

次男C男は「自立的で前向きな」、「マイペースで危なげない子」というイメージである。母親は上の二人のように余計な手出し口出しはせず、C男を安心して見守ってられる。そのためか、C男は姉や兄ともうまく関わっており、学校でも問題がない。

5. 夫婦連合と父親の参加

家族の問題解決を図るためには、母親が積極的に父親に助けを求め、夫婦連合を形成することが肝要

であった。この夫婦連合によって母親とB男の不適切な異世代間同盟を解消させている。口を閉ざしていた父親が、子どものことで意見を言い出すのは6回目の面接からであるが、これを機に父親の家族問題への参加は目覚ましい。A子の部屋の壊れたテレビはそのままにして置くという決定や年末の家族スキー旅行、家族全員でのトランプ大会、家庭教師をつけること、家の改装計画など、これらの家族の大事な決定は父親の口から出ており、そして夫婦共通の見解である。このような両親の一致した見解を父親が発表することが、子どもたちにとっては異議を唱えにくいものになるだろうし、家族としての一体感や絆を感じさせることになるのかもしれない。

6. 行動パターンの修正

家族は独自の行動パターンを持っている。この事例では、母親がA子と話していると必ずB男がそこに割り込んできた。そのパターンは次のようになる。

母親とA子の会話 → そこへB男が質問や用事を言いに来る → 母親がB男に応じる → A子は捨て台詞を残して立ち去る

このようにして母親とA子の会話はB男によって阻害される。このパターンがある限り、母親とA子の関係は親密になりにくい。A子の孤立には、それを持続させる要因が存在していたのである。事例では、母親は、何か言いに来たB男を無視した

後で、その用事を尋ねるとどうでもいいことであると確認できた。そのため、母親はA子との会話に割り込むB男の行動を、以後阻止することができるようになった。不適切な行動パターンが解消したわけである。一人の家族成員にある種の状態が持続している場合、家族の中にその状態を持続させるコミュニケーション上の要因があると考えられた。

7. 社会資源の活用

子どもの行動問題が解消しても、学校との関係や学業問題に課題が残されることがある。A子のように成績が悪く不真面目と評価されている生徒では、その指導は厳しいものがある。ガムを噛んでいた罰に1週間毎日謝りに行くことや期末試験対策に2週間前から毎日2時間分の宿題を課すことなどである。事例では学校・学業問題に関して、スクールカウンセラーや家庭教師という社会資源を活用した。それは、クライアントに今最も必要な人や機関、制度、サービスなどを手配するというソーシャルワークの援助方法である。心理治療においてもクライアントの認知変化や行動変容を待つばかりでなく、有用な社会資源を活用することによって、援助期間を短縮し、援助者の労力を省くことが可能になるだろう。

最後に、クライアント家族に事例の公表を承認してもらえたことを感謝します。

<引用・参考文献>

- 1) ネーサン・W・アッカーマン著、小此木啓吾・石原潔訳（1967）家族関係の理論と診断、岩崎学術出版社
- 2) 吉川悟・東豊（2001）システムズアプローチによる家族療法のすすめ方、ミネルヴァ書房、14
- 3) V・サティア著、鈴木浩二訳（1970）合同家族療法、岩崎学術出版社
- 4) 鈴木浩二（1983）家族救助信号、朝日出版社、42
- 5) 岡堂哲雄（1983）家族への心理的援助、家族心理学年報1、19-44
- 6) 鈴木浩二、平木典子、佐藤悦子（1987）座談会・家族は治療できるのか、現代のエスプリ242、9-41
- 7) 岡堂哲雄（1987）家族療法の動向と現状、現代のエスプリ242、52-62
- 8) 中村伸一（2006）特集にあたって、精神療法32（4）、409-413

- 9) 平木典子 (1983) 個人セラピーと家族療法の接点、家族心理学年報 1、77-98
- 10) 村上雅彦 (2006) 親面接を有効にするために—システムズアプローチの視点から—、精神療法 32 (4)、446-452
- 11) 高木俊一郎 (1977) 夜尿症、(内山喜久雄監修 情緒障害事典)、岩崎学術出版